

# 大学における初年度教育について

西村 靖史

## 【要 旨】

大学での学びへの接続として、初年次教育が非常な勢いをもって、大学教育に進展してきている。人間関係学科では2013年より、初年度教育として導入演習・基礎演習の取り組みについて報告と検討を行う。

初年度教育の成果として、個別学生の理解と教員間での情報共有には効果があると考えられた一方、アカデミック・スキルは専門教育を通じての到達目標の設定と入り口としての初年度教育の設定に教員参加体制の重要性が見えた。

## 【キーワード】

初年次教育、アカデミック・スキル、アクティブラーニング、協同学習、授業改善

## 1. はじめに

大学に入学してきた学生たちは、一様に不安と興奮を持つ。特に学習面においては、大学での学習についていけるだろうかという不安と、高等学校までとは違い、好きなことを学ぶことができるという自由への期待を持って大学生活を始める。

大学の進学率は2016（平成26）年8月発表の48.1%と過去最高の進学率<sup>1)</sup>となりM. トロウ（Martin Trow, 1926-2007）の言うユニバーサル・アクセス段階が本格化している。大学全入時代の流れを受け、高校から様々な背景をもつ若者が大学へと入学する。大学の入学制度は多元化し、このような様々な背景をもつ学生を受け入れるようになった。

大学での学びへの接続として、初年次教育が非常な勢いをもって、大学教育に進展してきている。

河合塾の出したレポートでは初年次教育に共通する目標が「受動的な学習態度から能動的で自律的な学習態度への転換」であるとした。この必要性を、高校以前までの段階で求められる知と、大学や社会で求められる知の性質の違いとして説明しており、高大接続の重要な大学の教育力の鍵となるものとした<sup>2)</sup>。

初年度教育の内容では、①スタディ・スキル系、②スチューデント・スキル系、③オリエンテーションやガイダンス、④専門教育へのガイダンス、⑤教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的としているもの、⑥情報リテラシー、⑦自校教育、⑧キャリア・デザインとして2007年に調査された結果では、③オリエンテーションやガイダンス、①スタディ・スキル系、⑥情報リテ

ラシー、④専門教育へのガイダンスが初年次教育として定着していた<sup>3)</sup>。

本学文学部人間関係学科では2000年の開設時より大学教育の基本を卒業論文の作成におき、論文作成法の授業を開講した。同時に社会的スキルとしてプレゼンテーションの授業やコンピュータ操作に関する授業を必修として、より実践的な習熟を基礎として専門科目の学習前段階の準備に取り組んできた。

2010年に実施された本学の全学的なカリキュラム改革によって1年次から少人数での演習科目として導入演習と基礎演習がそれぞれ前期と後期に開講することとなった。このカリキュラム改革へ対応して、本学科では少人数グループでの演習と、従来の論文作成法の授業内容を全体授業として時間配分し、実施してきた。

初年次教育を行う手法ではアクティブラーニングの手法が重視されている。アクティブラーニングは教授学習からのパラダイム転換をもたらすツールとして位置づけられている。溝上は、アクティブラーニングを一方的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴うものと説明している<sup>4)</sup>。

2013年より、初年度教育として導入演習・基礎演習の授業内容の検討をおこない、学生の1年以降の学習状況を検討し、調整を行っていく計画である。初年次教育の取り組みについて現状の報告と検討を行う。

## 2. 初年次教育実施の概要

人間関係学科における初年次教育として、導入演習・基礎演習のシラバスに示された授業概要、到達目標、授業時間外の学習、学生へのメッセージ、授業の内容・授業計画は導入演習、基礎演習のシラバスからの抜粋を図1、図2としてそれぞれ示した。

導入演習
<p>【授業の概要】大学初年度教育として、履修科目の設定や資格の習得の方法、ノートの取り方からレポートの作成、図書館の利用法、情報収集の方法、フォト・リーディング、クリティカル・リーディング、クリティカル・ライティングなど大学で学ぶために必要となるアカデミックリテラシーの習得を目的とする。授業は各小グループを中心としたアクティブ・ラーニング形式を用いて実施する。月に1回を各グループ教員とのミーティングとして報告を行う。</p>
<p>【到達目標】授業を通して学んだ履修登録やアカデミック・スキルについて基本的な説明ができる。それらのスキルについて継続的に身につけていくための方法論を説明できる。</p>
<p>【授業の内容・授業計画】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 第01回 授業の概要、履修登録・成績評価、ノートの取り方について</li> <li>2. 第02回 ノートテイク (Cornell Method Note)</li> <li>3. 第03回 読む・フォト・リーディング#01</li> <li>4. 第04回 読む・フォト・リーディング#02</li> <li>5. 第05回 図書館を利用する (図書館ガイダンス)</li> <li>6. 第06回 書評を書こう</li> <li>7. 第07回 資料を調べる (C i N i i インターネット検索)</li> <li>8. 第08回 グループ別セミナー</li> <li>9. 第09回 クリティカル・シンキング (論理的思考) #01</li> <li>10. 第10回 クリティカル・シンキング (論理的思考) #02</li> <li>11. 第11回 パラグラフ・ライティング#01</li> <li>12. 第12回 パラグラフ・ライティング#02</li> <li>13. 第13回 グループ別セミナー</li> <li>14. 第14回 パラグラフ・ライティング#03</li> <li>15. 第15回 まとめ</li> </ol>

<p>【授業時間外の学習】 毎回かなりの量の課題が要求されます。力をつけるために必要なものですので、かならず提出するようお願いします。必要によりグループワークなども要求されますので、各グループでのコミュニケーションを密にとり積極的に参加ください。</p> <p>【学生へのメッセージ】 導入演習は卒業必修単位です。また1年後期の基礎演習や2年生以降の発展演習の基礎となる個の力の育成とコミュニケーションのスタートとなります。必ず1年次に履修・修得してください。必要に応じて各グループの担当教員、科目の担当教員との面談も実施します。</p> <p>講義全体のコーディネイトは西村が担当しています。この講義に対する質問や相談につきましては下記へご連絡ください。もちろん各グループの教員にご相談いただいても構いません。</p>
--

図1. 導入演習シラバスより一部抜粋

<p>基礎演習</p> <p>【授業の概要】 基礎演習では、導入演習で学習した個別の力をさらに集団で発揮していくために必要な知識や態度について学びます。また学科の各コースの教員や卒業生から人間関係学科での学びに関する情報を集め、2年生以降の進路について検討を始めるきっかけづくりとします。</p> <p>【到達目標】 単なる話し合いから目的に沿ったObjectiveな思考を継続する力を身につける。論理的な態度で話し合いに参加できる。自分の目標を明確に表現できる。</p> <p>【授業の内容・授業計画】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 第01回 グループ別授業、授業概要配布、前期成績についての自己評価</li> <li>2. 第02回 Brain Stormingについて</li> <li>3. 第03回 KJ法について</li> <li>4. 第04回 プレゼンテーション（グループ発表）</li> <li>5. 第05回 卒業生授業01</li> <li>6. 第06回 グループ別授業（講義履修中間報告）</li> <li>7. 第07回 卒業生授業02</li> <li>8. 第08回 卒業生授業03</li> <li>9. 第09回 卒業生授業04</li> <li>10. 第10回 卒業生授業05</li> <li>11. 第11回 卒業生授業06</li> <li>12. 第12回 グループ別授業（休暇前指導・履修状況指導・試験対策）</li> <li>13. 第13回 社会福祉コース・教育・生涯スポーツ</li> <li>14. 第14回 心理コース・大学院臨床心理学専攻</li> <li>15. まとめ</li> </ol> <p>【授業時間外の学習】 毎回かなりの量の課題が要求されます。力をつけるために必要なものですので、かならず提出するようお願いします。必要によりグループワークなども要求されますので、各グループでのコミュニケーションを密にとり積極的に参加ください。</p> <p>【学生へのメッセージ】 基礎演習は卒業必修単位です。2年生以降の発展演習の基礎となる個の力の育成とコミュニケーションのスタートとなります。必ず1年次に履修・修得してください。必要に応じて各グループの担当教員、科目の担当教員との面談も実施します。卒業生やコースの案内については日程が前後する場合があります。</p> <p>講義全体のコーディネイトは西村が担当しています。この講義に対する質問や相談につきましては下記へご連絡ください。もちろん各グループの教員にご相談いただいても構いません。</p>
--

図2. 基礎演習シラバスより一部抜粋

## 2.1 初年次教育（導入演習・基礎演習）の授業内容

テキストは小笠原喜康の『新版 大学生のためのレポート・論文術』を指定し、受講者全員が購入している。

授業の実施の特徴として、学生のグループ学習を主体とするところにある。学生は入学後のオリエンテーション時に、小グループを構成し、学年担当教員、小グループ担当の教員とすでに対面し、4名～6名程度の小グループを構成している。この小グループを利用してグループを中心として授業を実施した（写真1）。

授業の補助教材として、毎回のレジュメ、ワークシートを配布し、授業全体は学内のeラーニ

ングシステム (Moodle) 上のコースとして、週ごとの情報提供や課題提出を行った。



写真1. 2013年度のラーニング・  
コモンズを利用した授業風景

### 2.1.1 導入演習での取組み内容

導入演習はアカデミック・スキルとして学生に準備しておきたいスキルの開発を開始する目的で構築されている。内容は進行にしたがって次の①から⑦を実施している。

#### ① 履修登録・成績評価・時間管理

履修登録・成績評価の授業では本学の履修や学生生活などをまとめた学生生活 (大学で作成された履修や様々な学生生活に関わる手続きや学則などをまとめた冊子)、開講科目一覧、授業時間割、履修登録票を持参し、全員必ず出席するよう入学時のオリエンテーションで伝達した。開講科目一覧から大学における授業全体ではどのような授業科目があるのか、1年生で履修できる単位について把握し、授業時間割をもとに履修する授業を実際に、1週間の時間割へと組み立てていくこととなる。同時に資格などを目指している学生は4年間を通じて修得すべき単位の概要を理解することになる。

この履修登録の作業において後で後悔をしないために理解すべき点として単位、講義や演習などの授業の形態種別、必修・選択や卒業要件、1年生以降のコース選択や教職などの課程履修の基準となる単位などを理解する必要がある。

単位についての理解では大学の授業の1単位の構成が単純に授業を受講するだけにとどまらないことは、授業前後の課題などに対して適応していくために必要となる。

評価に関する認識では本学で採用している Grade Point Average (以下 GPA) による評価に対する理解から、自身の各学期における履修について検討し、よりよい学習について考えることが大切である。授業の中では、海外大学における事例として大学卒業における GPA 得点について例を挙げ、2.0 ポイント以上を各授業・各学期における学習成果における目標の目安として明示している。

学生たちへは持参した学生生活、開講科目一覧、授業時間割、履修登録票を利用し、4年間全

体を通じて卒業までの取得単位数や、コースに必要な単位などについて検討するためのワークシートを作成し、相互に相談し、回答を探す方法により履修についての学習を実施した。ワークシートは授業後の回収を伝えて、回収し確認を行っている。ワークシートの回答について、簡単な説明から進捗状況を見ながらステップを分け、時間の制限を行いながら実施した。

大学における単位取得や学修のポイントとして行動の自己管理がある。科目出席チェックシートを作成し、学生に配布・説明を行い、小グループ授業などで確認するなど活用を行った。

## ② ノートの取り方について

大学の授業におけるノートのとり方として、コーネル式ノートの紹介とこの方法を利用したノートテイクを各授業において行うよう指示した。ノートの様式を印刷したものを研究室前に置き、学生はいつでも持っていけるよう準備した。コーネル式ノートの特徴は、ノートの紙面を大きく4つに分割し、1回の授業においておおかた1枚の紙にまとめ、後の復習や発展的な学習へと結ぶように作成できることである。

このノートはA4版1枚の用紙となるために、ノートをまとめる目的でファイルケースの購入を指示した。ファイルケースの利用については各授業別にとったノートを入れることに加え、その授業で配布された資料や提出したレポートの複写なども同様にひとまず、その授業の区分へ整理することとした。

これにより学期を通じてひとまとまりの学習成果物のまとまりを学生は持つこととなる。利用のアイデアとして、この継続により4年間で約8冊のファイルケースを作成していくことが大学における学修の成果として保有することになることを学生へ説明している。

ノートテイクの説明後、2週間にわたり取ったノートを持参し、グループごとに相互に記録した内容を比較し、よいところについて話し合う時間を設け、ワークシートに相互の評価や参考になるノートを作成している友人を選出し、書くようにした。

## ③ 読むこと（フォト・リーディング）について

本を読むことは、学習における重要な能力のひとつである。学生における読書の傾向は多量の本を読む学生と、まったく読まない学生の2極化を感じている。

本の読み方には様々なものがあるが、より多くの資料にあたるために必要な能力として速読を中心課題として説明し、実際の自分たちの読むスピードについて実際に計測を行い、読むスピードの個人の個人差をグループで共有した。

速読を行うために必要とされる眼球運動トレーニングと読書トレーニングについて、カリキュラムの進捗を連休期間に調整し、連休中の課題として実施した。

読書トレーニングの対象をテキストに限定して、1ページあたりの時間を15秒として目を通していくこととした。課題の進行日程表を配布し、6章から構成されるテキストを、始めは1日1章を目標とした。各章により18ページを4分30秒から58ページを14分30秒までをそれぞれ読むことから取り組み、6日間で完了する。2回目のセッションでは2章ごとにまとめて、3回目のセッションでは3章をまとめて、4、5、6回目のセッションでは216ページのテキスト全体を48分15秒で読むものとし、1回の読書量を少しずつ伸ばしていくよう図った。

## ④ 図書館の利用について

図書館の利用については、図書館職員による図書館ガイダンスを利用して実施した。図書館ガイダンスでは図書の利用や資料の検索などについて説明を授業として実施した。速読からの接続



と図書館の利用を実際に経験する目的で、次の週までに読む本の選定と貸借利用までを義務付けた。

課題として借りた本についての書評を作成することを課題とした。この授業以降4回にわたって、学生には毎週、本を借りる、読む、書評にまとめたものを授業に持参し、小グループ内で書評をもとに相互に読んだ本を紹介し、授業終了時に書評を提出、本を返却するという一連の作業を行ってもらった。

読書を通じて速読という動作を要求する一方で、書評をまとめる際には、この後のクリティカル・シンキングへ通じる力を養成する目的で、クリティカル・リーディングについても説明を行い、本の中で展開される論理について書評へと展開できることを目標とした。

#### ⑤ クリティカル・シンキング（論理的思考）について

論理的思考については基本となる論理の組み立てに関して、演繹法、帰納法、3段論法、トゥールミン・モデルについて簡単な資料を提示し、各グループで自身が説明する内容における論理構築能力を身につける演習を行った。

授業においては思考することを楽しむために、ブレイン・ストーミングの手法について小グループ毎で実践を行った。ブレイン・ストーミングを取り入れたのは思考の作業における発想をより柔軟に行うことでグループディスカッションを活性化する目的と、基礎演習への接続を考慮した。

課題に対して、小グループにおける意見をまとめて、授業終了時に各グループの代表により発表することとした。

#### ⑥ パラグラフ・ライティング

レポート・論文の作成法では、パラグラフ・ライティングを徹底し、1つのまとまりのある内容を積み上げる文章の作成について学ぶことを主な目的とした。資料の引用方法などについては主にテキストを利用するように指示を行った。

複数のパラグラフにより構成される小見出しを用いた形式を学科としてのレポートに関する標準的な様式として説明を行った。

#### ⑦ その他

導入演習の授業は月に1回の小グループ担当の教員との小グループゼミを実施する。この時間の各グループの共通テーマを作成する目的で、就学状況や進路の希望、期末試験対策の状況についてワークシートを利用してできるだけ、小グループ担当の教員が把握できるよう様式を作成した。

前期終了時のレポートは以前から実施している、「大学に入学して」というテーマでレポートの作成・提出を行った。学科で示した小見出しを用いた題材のまとまりについて、パラグラフ・ライティングの手法を用いて書くものとした。テーマの例示は具体的に、大学入学までから、大学への入学のきっかけ、大学入学直後の印象から前期終了間際までの経過をまとめるものとした。

学生に各学期の成績評価の返却に伴い、前学期のすべての科目の成績と取り組み、全体のGPAに対する感想、生活の状況、健康状態、前学期に対する自己評価と新学期に対する目標、将来への志望などを記入するシートを作成し、小グループで担当教員との個別面談の希望の有無までを书面化し、指導願った。2014年度からは大学全体に共通する学生自己発展チェックシートを利用して、記録している。

### 2.1.2 基礎演習での取り組み内容

基礎演習では、アカデミック・スキルとして、課題解決型のグループ学習を中心とした問題発見、問題共有、問題解決の検討や報告発表に至る過程を体験し、より有意義なコミュニケーションの展開や、自由な発想と有効な解決策に向けての資料調査、効果的なプレゼンテーションについて学習することを目的の一つとした。

また、学科として専門科目の設定が2年より分岐していく関係で、学生が進路を検討する情報として、社会の現場より卒業生による授業を複数コマ実施している。

基礎演習の構成要素は進行にしたがって次の①から⑥の内容を実施した。

#### ① 問題点への気付き

以前から実施されていた文章作成の授業などでは、主に問題点は教師側から与えられた問題点について考えるものであった。「大学での学びを考える」をテーマとして、大学で前期を終え、開講科目の選出・登録から授業の受講、課題、レポート作成、評価等を経験したばかりの学生たちからみた自分たちの学習を改善する可能性について取り上げた。

#### ② ブレイン・ストーミング

問題に対する発想で議論を活性化することは重要な意味を持つ。またコミュニケーションではどのくらい意見を出すかという点を、どのくらい意見を出しやすい場を作れるかという思考より、互いによりよい議論の場を作る考え方が理解しやすい方法論として、実施した。付箋紙を用いて出された意見は翌週の学習のためグループごとで保管され、次回のKJ法において活用した。

#### ③ KJ法

ブレイン・ストーミングで出された様々な意見は多様なものとなる。多様なアイデアをまとめて、問題点を見出していく手法としてKJ法を利用した。前週に行った結果をもとに、まとまりのある問題点を抽出し、検討する手法について学習した。

#### ④ 中間報告

中間報告では、自分たちでまとめた問題点3点程度について問題点と解決に必要となるアイデアの報告を行い、聞き手の学生たちによるアンケートを実施して、どのような問題点への取り組みがほかの学生から受け入れられるかを集計し、小グループの取組む問題点を選定することとした。

アンケートは各グループの3つの問題解決プロジェクト賛同性（事業の実施に賛同できるか）、協働性（参加したいと感じたか）、効率性（労力に対し期待される成果の妥当性）の3項目について反対0点から賛成4点までの得点をそれぞれ付けてもらい、回収した。小グループはこのアンケートを集計し、得点化することでどのような問題点へ取組んでいくかを決定した。

#### ⑤ プレゼンテーションの準備

プレゼンテーションソフトはPowerPoint、Preziのいずれかを利用した。両方のソフトについては前期の情報リテラシーⅠの授業において基本的な利用について学習している。

報告に必要なものとして、提示用資料、配布資料（レジュメ）、発表原稿の作成を行うこととした。小グループでそれぞれ報告会までの役割と、全体の世話役を決め、報告会・リハーサル運営を各グループの世話役となった学生によって運営するよう指示し、発表時間や進行、資料の準備な

どについて検討することとした。

リハーサルと報告会の日程は、基礎演習の残りの授業時間を利用し実施することで日程を決定し、実施場所はメディア教育・研究センターのメディアホールを利用して実施することとなった。報告順は学籍番号により分けられた小グループの順でおこない、発表時間を6分、質疑の時間を2分の1グループの持ち時間8分で行った。

### ⑥ 報告会の実施

小グループで検討した内容についての報告会を実施した。メディア教育・研究センターメディアホールを利用し、学生たちによる全体進行で各プロジェクトの報告を行った。

報告についてはリハーサルを行い、発表態度やプレゼンテーション内容についても相互に検討を行い、原稿読みを禁止として実施した(写真2)。2014年度のテーマである「大学での学びを考える」について、発表された演題と内容の概略を表1に示した。

表1. 基礎演習 2014 報告題名と発表の概要

題名	概要
1. プロジェクトX ～挑戦する若者たち～	講義が暇！という意見に対する魅力的な授業の実施と学生と教員の連携した授業の実施提案
2. これであなたもきっとグループ LINEが好きになるプロジェクト	LINEグループによる試験前や講義の休講・補講など様々な情報共有と学生間コミュニケーションの活性化向上の実施
3. 目指せ！授業中の睡眠時間0！	穴埋め小テストやグループディスカッション、眠らないための集中できる授業への学生・教員の協力提案
4. K4 Grade Up	シラバスへの授業情報の充実(学生の口コミなど)と授業情報交換会の実施
5. 模範解答配布プロジェクト	試験の振り返りができるよう、試験終了後に試験の問題・模範解答を学科教員の研究室前において配布する。
6. みんなでいっしょにがんばろう プロジェクト	留学生のための日本語能力スキル向上を目指した学習環境・方法の提案
7. 楽しんで単位をとるぞ！！	楽を効率化ととらえ、履修経験者との交流会などの情報交換による授業全情報の充実による履修失敗の無駄の削減策
8. 学力向上☆プロジェクト	試験前の1週間、教室を利用した「一人学習スペース」と「協同学習スペース」、「休憩スペース」を設置し、学生により運用する。
9. 授業がわかっちゃうぞ🙌	質問紙により、学生からの疑問を教員が回収し次回の授業でそれに対する回答をまとめて返却することによる授業フォローの実施。
10. 前に座ろうプロジェクト	積極的に前の席に座り、授業態度の改善を試みる提案

### ⑦ 卒業生からの授業

卒業生を学科の授業へ組み込むことは、今年度で4年目となる。もともとは2年次の発展演習においてキャリア形成を目的とした、より具体的なモデルの提示を学生に行うこと、また卒業生には卒業後の自身の状況と学生時代の振り返りの機会を提供し、自分の現在を見つめるきっかけを作る卒業教育の目的ではじめた。

専門職の資格を持っている卒業生をはじめ、いろいろな職業についての卒業生から、大学入学時や、在学中の学生生活、卒業論文や就職活動など現在に至る過程を話すとともに、今の仕事の内容について話してもらい、在学生の大学生活に対するメッセージについて話すものとしている。

4年前の開始後のアンケートで、多数の2年生からコースを検討するには1年時に聞いたかったとの意見が多く寄せられたため、1年次の基礎演習に配置換えを行って3年目の実施となる。

今年度は各コースの説明に、学科の担当教員と卒業生の組み合わせで、学科で学ぶ専門課程のイメージと幅広い社会への接続をテーマとして実施した。同じ専門領域でも社会への接続においては多様な仕事が存在することを理解するには、多くの卒業生モデルを紹介が必要であるが、現



時点で、卒業生の日程調整の困難さもあり、その点を教員によりフォローする形で実施した。



写真2. 2014年度 基礎演習における報告会

学科における初年度教育の中核を、導入演習、基礎演習として進めてきた。この授業の実施に連動する科目としては情報リテラシーが挙げられる。情報リテラシー I（前期2単位）ではタッチタイピングに始まり、eラーニングシステム、メール、ワープロ、プレゼンテーションソフトの利用教育を必修単位として実施している。情報リテラシー II（後期2単位）では表計算ソフトと統計処理を組み合わせて学習する。

アカデミック・スキルとしての情報に関わる部分は、このように切り出された形でありながら、レポート作成やメール添付による提出、さらにはこのような絶対的利用が必須とされる環境から学生のノートパソコンの個人所有100%を目指し推奨しており、後の様々な授業を受けるうえで基礎的活用能力となっている。

また、初年次教育として含まれる枠組みについて考えると、教養科目としての大学史と別府大学、キャリア教育、社会生活概論などはそれぞれに、自校教育やスチューデント・スキル系、キャリアデザインとして初年度教育の科目として捉える内容でもある。

### 3. 初年次教育の成果

初年次教育として導入演習・基礎演習の内容を見直し、実施した2年間の実践を踏まえた成果と問題点について検討する。

#### 3.1 初年度教育実施からみえる効果

2年にわたり導入演習と基礎演習においてアカデミック・スキルに関する授業を協同学習により実施した。このような授業の展開が、直接的に学生全体の変化を計量的に評価できるところまでは到達していない。本来であれば数値で示すことができる学生の各学年時におけるGPAの比較は優位な差は認められていない。受講態度の改善なども聞くことはできていない。

2014年度前期に実施した学内における授業評価アンケートでは、シラバスの利用と授業時間の問題以外は大きく学生に評価されていたことが示されている。アンケートの記述部分では大学での学習との関係性を感じている発言や、グループによる会話、親睦などについても学生は感じ

ていたと考えられる<sup>6)</sup>。

学生の課題レポートから、入学前セミナーや第2次オリエンテーションなどとも関連して小グループ活動を中心とした授業は、他県より入学した学生にとって友人をつくり、新しい環境に慣れ、大学生生活を安心してスタートする上で有益との意見もあった。

2年生となった昨年に受講した学生たちの中には、前期試験前にメディア教育・研究センターのエリアを利用して、試験対策について情報交換を行っている様子を観察しており、また感心したことはノートテイクについて、しっかり方法論を継続している学生が存在していたことであった。

このように全体としての本質的な教育成果はいまだ、見えてこない中で授業を担当した教員として感じている成果としては個別学生の理解の進展がある。

授業改善における授業の双方向性の改善によりミニツツペーパーや小テストといった取り組みにより、学習状況における個別学生の特性把握は進んできた。

協同学習によるアカデミック・スキルの授業の実施は、個別の学生における今後の学習におけるスキルの課題を明示してくる。例として2年間の導入演習の中で速読を実施することで本を読む、文字を読むというスキルに大きな困難を抱える学生の存在について認識することとなった。

対人関係においてもコミュニケーションができるようになりたいと望みながら集団に適応できない学生や、学生相互の価値観の違いを許容できず、グループでの活動に問題を抱える学生など、それぞれに程度の違いを持ちながらも各年度で存在した。

小グループ毎に実施される授業では、教員に学生の持つ現状の問題点をより理解しやすくするための工夫として、共通の様式により授業の出席状況や試験の対策状況などを準備して、利用したことは少なからず、同じ学生に対しての授業を持っている教員と、個別の指導にあたる教員の学生理解の共通化を引き出してきている。

### 3.2 初年次教育における成果とは何か

アカデミック・スキルの修得には2つの視点がある。自己満足度を指標とした学習達成感や学習達成度という観点と、教員が評価する際に必要となる相対的評価や個別学生の習熟度の伸びといった評価の観点である。実際に評価をする立場を経験すると、その評価の困難さを痛感している。特に小グループによる協同学習になると、学生の協同性に対する評価を、どのように取り入れるかという点において困難はいっそうであった。

今年度担当する小グループにおいて興味深かったことはLINEグループを構成し、担当教員もそのグループに参加したことにより、学生たちの関係性における役割分担や課題に対する積極性などの行動も観察することができたことであった。

学生たちにとって、レポートの書き方や論理の組み立てといった領域は、もともとの苦手意識も手伝って、なかなか満足な達成感へ結びつく成果へとは結んでいないと感じている。

このような評価の問題は、合わせて初年次教育のプログラム自体の評価でもあり、評価方法の確立へ向けた試行を行う必要性を感じている。

## 4. 初年次教育の展望

2013年、2014年の2年にわたり学科の初年次教育としての導入演習・基礎演習を担当し、論文作成法から逸脱した新しい初年度教育プログラムの検討を行った。

初年次教育は様々な要素からなるが、基本的な方向性は大学での学びの充実であり、大学生活

をより意味あるものにする知識とスキルである。

学科FDにおいて毎年2回、教員間での初年次教育についての協議を行ってきた。初年次教育の、特にアカデミック・スキルの充実の成果は、本来、各科目の学習への適応に現れる。初年次教育の本質的な成果は4年間を通じて学生や他の授業を担当する教員により評価されるべきものである。

学科FDではあまりの内容の多さにその成果についての疑問も投げかけられている。この疑問は当然である。本質的な力の獲得を15回の授業の中や、課題により画一的な学生のスキル達成は厳しいものがある。成果は複数の既存の科目への分散という横の展開と、学年進行にしたがって、多くの教科において多くの課題に取り組んでいくことにより磨かれていく縦の展開を必要とする。

例を挙げるとすれば、情報スキル系は明白である。入力操作であるタッチタイプから始まり、スキルの要素の基本を徹底的に上げるよう十分な課題を課し、基準値を設定し、厳格な評価を行う。また反転授業により、課題提出を明確に位置づけることで、自主的な学習を支援し、教員からの支援は十分に学生が時間を費やした後のものとして設計された。アウトカムは、パソコン利用における自立であり、必要があればわからないことも、自分で調べて、対応できる情報リテラシーの確立を設定している。この成果は、学習実態調査においてパソコンやインターネットを活用する力（情報リテラシー）について40%を超える学生が「かなり身についた」と回答し<sup>5)</sup>、自身の成長に確かな手ごたえを感じていることが成果となる。

初年次教育の成否は、到達目標を設定において、学習の質の保証と深く関連する。初年次教育を初年次教育単独として、その成果を問うことは適切ではない。

アカデミック・スキルを必要として初年次教育を行うことは、専門教育においても継続して必要なものである。パソコンのスキルを身につけ、ノートパソコンを持っていることは、それを前提として実習の授業や、専門演習、卒業論文演習などで積極的に利用する連動性は保障されることが必要となる（写真3）。ノートテイクについてそのノートでよいかという議論を継続しながらも、ノート提出を義務付け、ノートを取ることを継続する授業が2年生以降も実施されている（写真4）。



写真3. 心理学実験演習でのPC利用

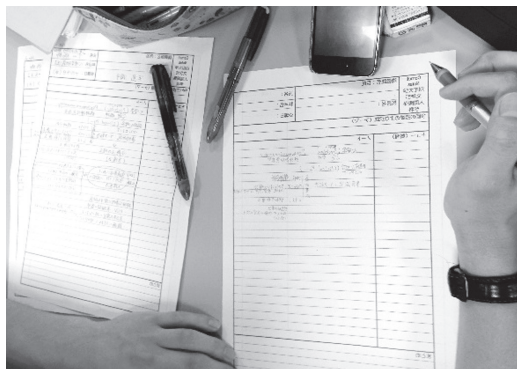


写真4. コーネルノートの利用

初年次教育は、大学における学習を俯瞰する入り口であり根幹をなすものとして捕まえ、その到達目標は設定される。これはアカデミック・スキルの到達目標は大学で授業を行う上で、学部や学科、コースにおいて共通の要素を含むことを意味し、関わる教員の相互理解と支援を必要とする。

同時に初年次教育に関連する科目は、その目的が大学教育全体のアウトカムの設定によるものと理解し、学生の指導にあたるものとなる。

多くの教員の参加は、アクティブラーニングや協同学習といった教授法について実践的に経験し、自身の専門授業の改善にも繋がる可能性となる。

初年次教育の実施では、協同学習を行う教室環境が必要となる。2013年度はラーニング・コモンズを活用したが、運用状況の変化により2014年度は心理学実験室を利用した。より効果的な授業を運用できる環境の構築と確保を検討していきたい。

## 5. おわりに

2013年度、2014年度に文学部人間関係学科において実施した初年度教育としての導入演習、基礎演習について内容の詳細を含めて振り返った。そこから改めて、高校における教育から大学教育への接続、初年度教育と専門教育への接続における様々な教育課題の存在が顕在化した。

初年度教育の成果として、個別学生の理解と教員間での情報共有には効果があると考えられた一方、アカデミック・スキルにおいては専門教育を通じての到達目標の設定と入り口としての初年度教育の設定における教員の参加体制の重要性が見えてきた。

さらに、今回取り上げた導入演習、基礎演習以外に初年度教育として位置づけられる科目の存在が明らかとなり、大学全体のアウトカムとして今後の授業改革の重要なポイントになる可能性が考えられた。

## 引用文献

- 1) 文部科学省、『平成26年度学校基本調査(速報値)の公表について』、2014年8月6日
- 2) 河合塾、2010年、「大学の初年次教育調査」、『Kawaijyuku Guidline』、Vol.9、25 - 35
- 3) 山田礼子、2013年、「1章 日本における初年次教育の動向 - 過去、現在そして未来に向けて」、『初年次教育の現状と未来』、初年次教育学会編、11-27、世界思想社
- 4) 溝上慎一、2014年、「第1章 アクティブラーニングとは」、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』、3-23、東信堂
- 5) 別府大学・別府大学短期大学部 IR 委員会、2014年、『平成25年度学習実態調査』、63
- 6) 別府大学、2014年、『学生による授業評価アンケート(報告)』

## 参考文献

小笠原喜康、2009年、『新版 大学生のためのレポート・論文術』、講談社